

第6回フォーラム代官山

『旧三田用水』に関する研究発表・提案・座談会

主催：NPO法人・代官山ステキ総合研究所
東京商工会議所・渋谷支部、他

日時：2010年12月3日（金）
（開場 18：15 開演 18：30）

場所：代官山ヒルサイドホール

プログラム

1. 挨拶 開会挨拶：岩橋。 総合司会：石原。略
2. 第1部 <代官山スタイル研究会>と「代官山ビジネス・ガイドブック」の報告と計画；湊元良明：東商渋谷事務局長。略
3. 第2部
研究発表
『旧三田用水が形成した文化的景観の歴史的変遷と再生に関する研究』
牧 寛：慶応義塾大学大学院 政策・メディア研究科
（平成22年卒・横浜市職員）
4. 第3部
提案（これからは徒歩経済圏）
代官山『緑の文化十字路』と『三田用水研究』の成果活用
岩橋 謹次 NPO 代官山ステキ総合研究所理事長
5. 第4部
代官山座談会：地域資源と代官山活性化について
司会：元倉 真琴 NPO 法人代官山ステキ総合研究所副理事長
座談会参加者：伴 文康（長谷戸町会会長）
海老沢 宏（鶯谷協和会会長）
佐藤 與治
（めぐろ観光まちづくり協会会長、佐藤商会会長）
牧 寛（旧三田用水・研究発表者）

第1部、東商・渋谷の報告と計画の発表を受けて

石原：湊元さん、ありがとうございました。

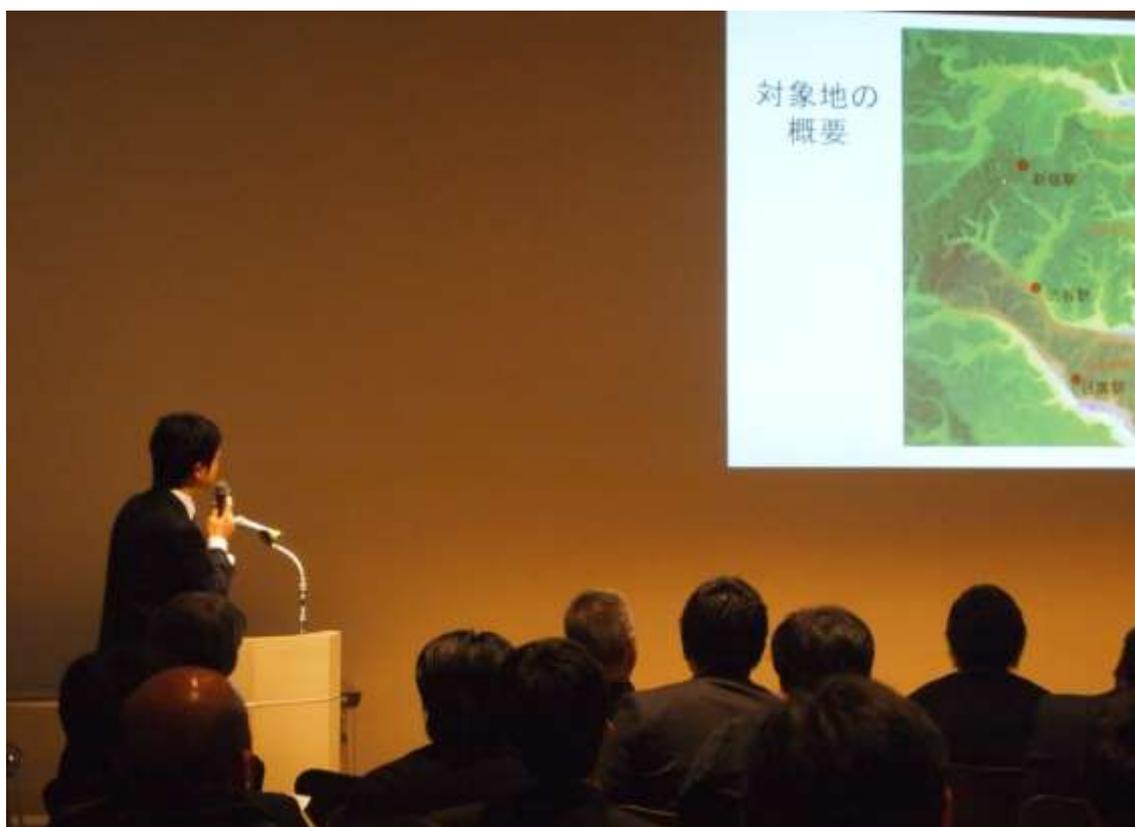
時間どおりですね。今回の「代官山・ビジネス・ガイドブック」なる本は、代官山を広く今日的課題でとらえた、大切な本になるものと期待しております。

次は<旧三田用水が形成した文化的景観の歴史の変遷と再生に関する研究>という表題は難しいけども三田用水を学術的にきちんととらえたものです。講演して下さる牧寛さんは慶応義塾大学の政策・メディア研究室のご出身です。このフォーラムでもご登壇いただいております小林博人先生の研究室で修士論文としてこの研究をまとめ、現在は横浜市の職員として勤務されています。

受付で配布した、三つ折り資料。これをベースに、ご説明をいただきます。牧さん、よろしく願いいたします。

第2部

「旧三田用水が形成した文化的景観の歴史の変遷と再生に関する研究」



牧：ただ今ご紹介にあずかりました、牧寛でございます。

研究タイトルは『旧三田用水が形成した文化的景観の歴史の変遷に関する研究』です。この研究の背景として、一つは最近「文化的景観」というものが法制備などによる新しい動きが見られるということです。次にまちづくりの画一的手法脱却の多様な機運が出てきているという社会現象などがあります。その中でも失われた景観や河川、韓国でいうと清溪川（チョングジョン）を親水空間として景観再生するという動きがあり、本研究もそうしたものにつながるものとして、研究しました。

「文化的景観」といっても皆さんには聞き慣れないと思います。普通、「景観」といわれると、街並みですとか、その見え方、表面的なものを想像されると思いますが、それに「文化的」が付くと、研究などでは「景観地」として表現されます。それまでの「景観」というものでは、表面的に建築ですとか、伝統的な建築を保存するためとか、やはり表面的に出ている外装、内装は別にして外装だけ保存しようということがありました。しかし実際に建物などを保存しようといっても、実際に昔ながらの使われ方や、やはり使い続けないうまく保存できない。実際に人の営みがないとその景観というのが守れないだろうと、そういった全てひっくるめてまとめた新しい景観の分類、ジャンルとして「文化的景観」が位置付けられた、新しい概念です。

少し前から世界遺産条約の一つの項目として追加されました。その中では自然と人の共同作品として評価できるものと定義されています。日本国内では「文化財保護法」や「景観法」、「歴史まちづくり法」などで近年体系化されてきて、実際に保護するものとして指定に入っています。その最初となる「世界遺産条約」の中では、実際に指定されているのは農村部のみの指定です。しかし日本は農村部と都市両方が対象になっていて、それがやはり農業と都市というのが、日本では切っても切れない縁で、すごく近い、関連付けて考えられているのが日本の考え方の特徴です。

その中でもさらに文化財保護法の中で「重要文化的景観」というものが指定されて保護の対象になっていますが、その選定過程で現在その痕跡が保存されていないとか、もうなくなってしまうとか、徐々になくなりつつあるというのは除外されています。現在の法体系では選定的計画の対象とならない、「失われた文化的景観」というのが保存対象にならないので、失われ、どんどんなくなっているという現状があり、それをどうにかできないかということで、そのことを今回は研究テーマとしています。その対象として旧三田用水に注目し、研究を行いました。

論文の難しい話ですが既往研究をおさらいします。用水路に関する研究とか、景観分析の仕方の研究、また新しい文化的景観に関する研究です。先ほど述べたように失われた景観、しかも都市部の中での研究というものはありませんでした。「景観分析の手法」を、これまでの研究から参考にし、その手法を使って研究を進めていきました。

その手法ですが、1番目は基本的な情報として周辺地域の歴史的な文脈の整理を行います。2番目はマクロな視点で地域分析として基本的なことを抑えます。3番目は具体的に一つ一つ残されている情報から文化的景観要素というものを抽出し、分析しています。さらにその結果を用いて4番目として、その地域のポテンシャルを抽出してこうという手法で行いました。

対象地は、渋谷と目黒の位置関係から抑えていただければと思いますが、目黒川と渋谷川・古川に挟まれている台地が対象地域となります。

三田用水の位置付けとしては、玉川上水の一つの分流、分水として、先ほどの地域に笹塚取水口より流れ込んできたものをいいます。

その歴史ですが、玉川上水が開通してから10年後の1664年に各方面に分水されますが、その中の一つの上水として三田上水が整備されました。その目的は末端部分にある白金御殿や、細川屋敷など有力大名の屋敷へ給水をするためです。その後1722年に、風水上的理由から一時上水は廃止されてしまいましたが、農業用水として使用されている農村の方々が反対し、懇願というかたちで幕府に頼み込み、復活を遂げました。その過程で利水組合ができ名前が「三田用水」となり、約320年間、1974年まで長い期間、用水が流れていたという歴史がありました。

分水路をそれぞれ調べていくと、(図の)一番左上に玉川上水からの取水口があり、そこが笹塚、現在でもその取水口が存在し、見る事が出来ます。そこから真ん中の台地の尾根線が本筋で、例えばそこから東大駒場のキャンパスがあるところ、その手前で分水しています。文献で調べると、分水口、分水路、本筋から分水している名前がそれぞれ付いているのが分かりました。(資料表紙の図参照)

ここにはちょっと示してないのですが、記録ではこの末端部分に西応寺というお寺がありまして、そこまで開渠部分なので、その部分は線が書かれていません。ここまで暗渠かどうかは別にして、江戸時代の当初から水が通っていたことが分かりました。

現況ですけど、東大駒場の外周の旧山手通りのわきに無造作に置かれている用水路の外構があります。そのほか、道端にこんもり階段ができていたりとか、ここを通っていたという水路橋などが、現況では想像して探していかないと分かりませんが、都市の中に埋もれてしまっています。かつてあった三田用水というのを分かっていないと気付にくいのが現状です。

そこで地理的特性をとらえるために状況を見ていきます。地形に用水路の位置も重ねてみました。用水路の性質として昔はポンプなどなかったので、自然の勾配を使って高さを保ちつつ遠くまで運ばなければなりません。地形的に見ても高いところを選んで水が通されていたのが分かります。これが本筋のラインです。

江戸時代の坂というのは現在も坂の名とともに残っているケースが多くあります。この三田用水本筋のラインというのが江戸の市中と江戸の外の境界が多くのところ、オーバーラップし、境界としての役割も果たしていました。なので、江戸に入る手前ですごい崖地があり、そこを上ってきたところで旅人の疲れを癒すために茶屋が設けられたという地理的、社会的文脈がありました。

対象地域の設定は、GISといった地理の分析ソフトを使って水が集まってくる領域というのを最低0.5ヘクタールに設定して分析して囲い出し、三田用水の本筋のラインを重ねて、三田用水として関係している地域をすべて拾い出したのが今回の研究対象地域となっています。

歴史の変遷分析(資料図1、歴史の変遷分析)ですが、まず水系、江戸時代に基本的な分水が完了しています。明治40年に入りますとさらに細かく分水していきますが、本筋と小さく分水しているところがプツプツと切れていって、市街化によって水路がどんどん切れて細かくなってしまったというのが見て取れます。そして昭和12年の地図では、そもそも本筋といった大きな範囲ですべて消滅しつつあるということが分かりました。

それともなって緑地の変遷です。これは昭和22年から、短期間でしか見てないのですが、昭和22年のころまでまとまった緑が全面に広がっています。その後は緑のまとまりはどんどん分散してしまいます。真ん中にコアのような緑があります。それが目黒の自然教育園で、この地域の大きな緑のコアとしてまだ現在も残っています。そこ以外では緑のまとまりも急激になくなってしまったということです。

土地利用を調べますと、江戸時代、海に近い下流地の方で武家屋敷が広がっています。明治時代になるとどんどん市街地が広がってきています。しかし、それぞれ大規模に利用して邸宅地というのも武家地に変わって大規模な利用は残されてきています。その市街化がだいぶ進んだ現在でも、大規模な利用が場所によって残っているのが見て取れます。

次に生業の変遷として水車と工場を取り上げました。また江戸時代では、富士塚という

ものが中流域の辺りに多く近接して分布しており、代官山では、同じ塚としていえば猿楽塚というのがありました。富士塚といいますのは、江戸時代の庶民の間で大流行していた富士講、宗教といいますか、形態としまして富士山に登る代わりに、地域に小さな人工の山（塚）をつくって、そこに登ることで富士山に登ったということで、周期的に行われていた行動の対象です。

明治に入りますと水車の位置が出てきます。この地域は農業が盛んなところで、農業のかたわら、三田用水といった高いところを通っている水を崖などの落差や横に滑っていく勢いを動力として利用して水車が多く造られました。それによってその地域の経済といいますか、生活が支えられていました。それが昭和になりますと工場に移り変わって、やがてその分水も同時になくなってしまっています。

その当時の全体の絵として残っている資料がありました。こちらは鳥観図ですが、大正10年のころ描かれた絵です。ここが目黒川で、こちらが渋谷川、真ん中に三田用水が通っていたラインがあって、それと崖をなぞるように緑地、崖線緑地といいますが、崖の緑地がすごく広がっていたことと、全域に水車の風景が広がっていたことが分かります。

以上をまとめて時代別変遷とおしてこの表（資料表1）は作りましたが、大まかにいいますと江戸、明治とそれぞれいろんな景観要素として水車ですとか、坂ですとか、富士塚がいろいろ造られてきたわけですが、それが一気に近代化によって大部分消失してきてしまった。水車ですと33基、昭和、大正期にあったのが一気になくなって、現在は松濤鍋島公園というところに当時のものではないですけど復元したものが残っているのみです。

次にそれぞれ細かいところを見ていきます。文化的景観資源の分析としまして、それぞれ景観要素一つ一つの資料を見ていきました。その結果を次に述べます。まず分析方法としまして、三田用水に関連する写真などを寄せ集め、文献などによって状況を調べました。その中から三田用水そのものを写したもの32点に絞り、またさらに地域でまとまっている、本筋と分水地区で17地区に設定し、それぞれに分析を行いました。

その位置が「①文化的景観分析」の地図に書かれている四角です。実線で描かれていたのが本筋に関する文化的景観資源の分析で、それぞれデータシートを四角ごとに作っています。また、地点をプロットしたのがこの点ですとか、方向です。

それを写真、主な画像データを集めたのがこの表です。下の敷地図が旧朝倉邸の平面図です。具体的に新道坂地区というタイトルで例として挙げますが、恵比寿から中目黒方向へ向かって下りていく坂です。その坂の上に昔は水路橋がすごく長いスパンで通っていました。覚えている方もいると思います。またそこに近接して、先ほどいいました富士塚というのがありました。このような急勾配な人口の山を造って、それが絵図になっています。

また朝倉邸のお隣の根津邸は茶畑があったという資料がありました。猿楽塚もこんもりした山だったという、そういう地形の豊かな風景が広がっていたようです。

次に「②線的土地利用分析」といまして、それぞれ本筋・分水ごとに土地利用と先ほどの資源と用水路とどのような関係があったかを見るために、このように線として土地利用を投影して、その関係を分析しました。次に本筋、端から端まで簡略に縮小した図ですけども、江戸時代に名所が三田用水と関連して配置されていたのが分かりました。各分水に関しては、それぞれ畑の中などを通っており、本筋とは正確がちょっと違います。本筋は高いところ、丘の上を通っているのに対して、分水筋は谷地を通っていくので、そういった性格の差が顕著に見られたということが結果です。



具体的にそこで分水筋について述べてなかったもので、具体的にあげてみますと、昔は神山口（カミヤマグチ）というところが、今は神泉という駅が京王線にあります。その周辺地域に流れていた分水筋です。昔、紀伊中将という徳川家の屋敷があったところが、明治時代に鍋島邸という大地主邸宅になり、広く農場としてオープンスペースとして使うようになりました。その一部が現在、残っている鍋島松濤公園です。そこに水車が復元されて現在あるということです。

具体的に一つ一つ述べていくことは時間的な事情でできませんが、今までの資料をまとめたのが右側の表組みです。左端にその地区の景観写真等で、昔の資源と現況の写真、景観資源、その右に歴史の変遷を表にまとめました。この資料の折り目になっている表です。それぞれの変化と地形的な構造にどのように広がっていたのかを読み取り、その特質をまとめました。

さらに今も残るものを調べ対応させています。表のところでは背景で色分けして体系別にしました。緑が本筋のところが多いのですが、台地の端のところでは眺める庭園の景観という類型化ができました。これは台地、崖の際までに庭園ですとか、屋敷を設けて、富士山を眺めるための景観地としての整備、形成がされていたということです。ピンクのところは、逆に谷地に分水が流れていたもので、分水が多いのが谷地のまとまりのある景観ということで、現在は住宅地としてその構造は残っています。3番目は青いところですが、緩やかに小川が流れて、そこに水車と橋とがある景観というのが両方に少しですが形成されていたという結果が分かりました。

今後それをどう生かそうかということで、ポテンシャルとして評価してあげようということで次に述べます。ポテンシャル評価としまして、現在と過去の先ほど空間的構造としてまとめているところが、現在と比較して何が残っているのかとか、法的担保されている

のか、いないのかということで、法的担保されているところはポテンシャルとして評価できる。逆に昔から残されていたのが法的担保はないというのは、緊急性を要するところとで評価しました。

それらをもとに文化的景観ポテンシャルマップ、ポテンシャル図としてまとめました。過去の文化的景観がどのように広がりを持っていたとか、どういった特質を持っていたのか、また景観の特性等、それぞれ番号を振ってまとめています。

以上、総括としまして、三田用水は先ほどの対象地域を支える社会共通資本であって、都市の成長に応じて変化する、都市景観を常に支えるものであったといえます。また、先ほどの表、文化的景観構造図といいますが、それを作成することで景観構造とパターン、その特質が分かりました。

現況では特有の文化的景観を支える景観資源が、少なくとも一つは存続していることが分かったのですが、さらにそれを守るため、また新しく生かすために整備が必要だということです。最後に現在と比較してポテンシャルとして評価したポテンシャル図を作成する過程を、再生に向けて評価する一つの方法として示しました。

論文としてはここまでですけども、さらに僕のいたSFC（慶応義塾湘南藤沢キャンパス）という大学院では最後に提案することが一つの課題でしたので、ポテンシャルをどう活用していくかということで検討を行いました。

先ほどの特徴を生かしていくためにはどうすればいいのかということで、僕の考えですが、まず、本筋であったルートを環境インフラのコアとして再設定するために尾根道を整備します。次に谷地を通る各分水路も谷道として整備し、尾根道をそれぞれの住宅地へとつなげます。これらの尾根・谷道とともに目黒川と渋谷川沿いの道から延びる道とともに整備することで回遊性を持った動線計画にしました。

次に、それぞれの地域での三田用水の関連する文化的景観を再生、拠点を形成するために、それぞれの歴史的な緑地・建造物・公共施設の隣接するものを一体的・重点的に整備します。さらにその見え方、眺望景観を再生して保全・形成していくためには景観規制が必要であるということで景観計画を設定します。最後に三田用水の流れの再生ということで、尾根道や谷道に水を通してあげて、本親水空間のある豊かな空間を生み出してあげればいいじゃないかということで、以上をまとめて最後の絵として「図2、文化的景観ポテンシャル図」を再生ビジョンとして描きました。

今回研究する前に、デザインスタジオという学校の授業で、代官山の地域、この旧JRの宿舎の社宅があったところを対象地としてデザインスタジオということで模型とか、計画とかを提案する授業があったのですが、そこで三田用水の存在を発見して、昔、この近くに僕が住んでいたこともあり、取り上げたという次第です。ご清聴をありがとうございました。

石原：ありがとうございました。

大変貴重な調査で、短時間ではもったいない感じです。私は代官山に62年間ほど住んでおり、三田用水で遊んだ経験があります。でも用水といっても当時は全部暗渠になっていました。この近くで1カ所だけ暗渠じゃないところがありました。ご紹介のあった駒沢通りの水路橋の上はずっと開いていました。そこの鉄橋から入って、堰をつくりプールにし

て魚を釣ったりしました。そうした小学校ぐらいのときの思い出があります。三田用水は分水嶺の一番高いところにあって、景観的には直角方向から向かっていくといいシーンにたくさん出会います。いまいわれたようにそれを横断的にずっと見て歩くと、なかなか面白いと思いました。今、三田用水の実体はほとんどなくなりましたが、三田用水を意識して歩いてみると非常に懐かしく、しかも景観が非常によかったということで、そうしたことをこんな形でまとめていただいたことは大変素晴らしいことと思います。次回は、もう少し大きなかたちで発表できればと思いました。

それでは引き続き三田用水関連の話題ですが、渋谷と代官山との関連で、展開を少し十字に広げ、代官山ステキ総合研究所の岩橋さんが、「緑の文化十字路」という構想を昨年、発表しています。今日はそこに旧三田用水エリアも含めて、大きな緑の徒歩圏として扱うという提案をいただきます。では、岩橋理事長、よろしくお願いいたします。

第3部 「緑の文化十字路と旧三田用水研究の成果活用」



DSI第4回フォーラム代官山
2009年11月13日発行



DSI第6回フォーラム代官山
2010年12月3日発行

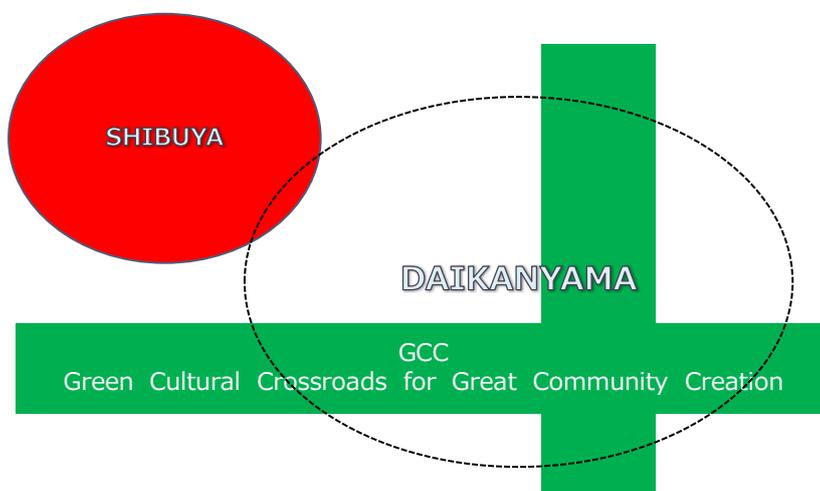


岩橋：岩橋です。表題には括弧で（これからは徒歩経済圏）と書いてあります。

「徒歩経済圏」とは耳慣れないと思いますが、最近、注目されているキーワードです。それを結び合わせてこのエリアの将来像を考えてみようという提案をします。但し、これから話すことは、ステキ総合研究所の中ではまだ正式に議論してきたわけではなく、個人的に発想したことで、皆さんと議論していく今後の材料になればと思っています。

お手元に2つのパンフレットがあります。1年前に「緑の文化十字路」を提案して、それから1年たって旧三田用水の報告があった。パンフレットの裏には、私どもステキ総合研究所の活動経緯が書かれています、当初から三田用水そのものが代官山の今の魅力の源というか、根底はそこから来ているのではと、直感的に感じていました。いろいろな方に研究や、発表をお願いしました。去年の文化十字路のほうにも一部三田用水を「オープンミュージアム」化してはという提案をしております。しかし僕たちの力では本筋のところだけしか目が至らなかったのですが、今日の発表に有るように、分水が広げてきた渋谷川と目黒川に至る、かなり広いエリアが一つの流水文化圏というか、「文化的景観エリア」を形成しているのがよくわかりました。景観は大変難しい言葉ですが、人間の目に見える範囲は全部景観だと思えます。景観法という法律の最初の部分に景観は国民の資産であると書てあるようで、なるほどと思いました。その資産がだいぶんいじめられているわけで、そういったものを地域の魅力に転換していくことは、まだまだやれてないし、今ならまだ保全・再生できると感じています。従って、この2つの提案資料といいましょうか、レポートは、実はその課題は相互に関連し合っています。

渋谷駅中心地区と代官山エリアはそれぞれ 個性を磨き相互に魅力的なパートナーになる



緑の文化十字路のほうは、代官山と渋谷に関係する問題です。つまり今まさに渋谷の中心地区が大激変をはじめているということです。ついこの10月、東京都都市計画事業として施工決定が報道されていました。着工は22年度で平成38年まで16年間かかる大プロジェクトです。一部の工事はスタートしていますが、今から2年後、2012年には東横線の地下化が実現し、昔の東急文化会館の跡地は「ヒカリエ」に生まれ変わる。そこには日本最大級のミュージカル劇場、商業施設、業務施設、都市施設等の大集積が生まれます。それをスタートにロングランのプロジェクトが次から次へと建設され、577億円の事業費がかかると言われています。

近接する隣駅がこのように大変化をします。この動向に対してして代官山はどうしたらいいのかということですか、私どもが考えたのが「緑の文化十字路」という提案です。

渋谷駅周辺は毎日どこかで大型工事をやっている活発なエリアになります。それに対する代官山の緑の文化十字路というのは、代官山を交点に緑の横軸と縦軸をクロスさせ、代官山の特質を最大限強化しようというものです。横軸のほうは緑の崖線も残っており無理ありません。縦軸のほうは東横線の地下化跡地などを緑活用できないかという期待も含めて、地域の願望を形にしたものです。

代官山駅周辺には広々とした場所が、西郷山公園以外には皆無で、八幡通りを含めて縦の緑の軸ができればいい。緑で埋まる縦と横の軸で緑の文化十字路が形成される。そういうことを提案したものです。渋谷が今、大変な勢いで開発されていますが代官山が同じようになってしまっただけでは意味がない。お互い違うからこそ良いのであって、それぞれが個性を磨き合って、相互に魅力的なパートナーシップを持った都市になれば良いのではないかと。相互の魅力を補完し、引き立て合うような関係になれば一番いいと思います。そうしたコンセプトを緑の文化十字路としての可能性を提案したものです。こういう材料に地域の方々が刺激や影響を受けて、少しずつ関係者の方々と議論が深まれば良いと考えたのです。ただ、代官山というのは、最近まで、住宅地だったところへ突然のように都市的というか、特徴を持った都市施設、特徴ある商業集積ができた場所です。従って地域ビジョンなどを提案していく基盤も組織も弱いというのが現状です。この話は代官山にとって大事なことですが、今日はこの辺で次にいきます。

次は「これからは徒歩経済圏」という提案です。実は『日経ビジネス』（10月25日付号）の特集に「小さな町が市場を変える。徒歩経済圏を掘り起こせ」という、9ページに渡る、特集が組まれていました。そこに徒歩経済圏という新しい言葉で、これからの都市経済コンセプトが紹介されていきました。それを参考に、『代官山徒歩経済圏』を発想したのです。

日経の記事に、面白いグラフがありました。左のグラフはスポーツシューズの売り上げ推移です。これは右肩上がりです。一方、右のグラフは自動車の販売推移です。年間600万台ぐらいいったのが、ガクンと右肩下がりになっています。

自動車経済圏から徒歩経済圏へ ～徒歩経済圏が生む新たな商機～

これまで ＜自動車経済圏＞	今、これから ＜徒歩経済圏＞	新しい街づくりの萌芽 ＜プラチナ経済圏＞
マイカー移動による消費	徒歩移動による消費	コンパクトシティの誕生
ドライブ・自動車旅行。 ロードサイドビジネス。 郊外住宅。郊外レストラン。 郊外大型SC(ショッピングセンター)	「フラットシューズ」その低い歩きやすいウオーキングシューズ。スニーカーの日常化。山女子。街中ランナーズ。女性カメラマン	中心市街地に徒歩経済圏復活の兆しができた。環境負荷の低いエコでコンパクトな街づくりが先行している。
戦後、日本の地方都市はモーターゼイションの発展とともに、多くが郊外拡散型の街づくりをしてきた。そのため中心部は空洞化し、徒歩経済圏は消滅	EV。自転車。スクーター。エコバス。次世代路面電車。歩数計。ウーキング・エクササイズ。街歩き。街歩き用品(デバック、水筒、バッグ)他	三菱総研提唱のプラチナシティ構想は、地球環境に優しく、高齢者が元気に活動できる街と規定し、国内100都市を再開発し、関連市場規模は13兆円と試算。

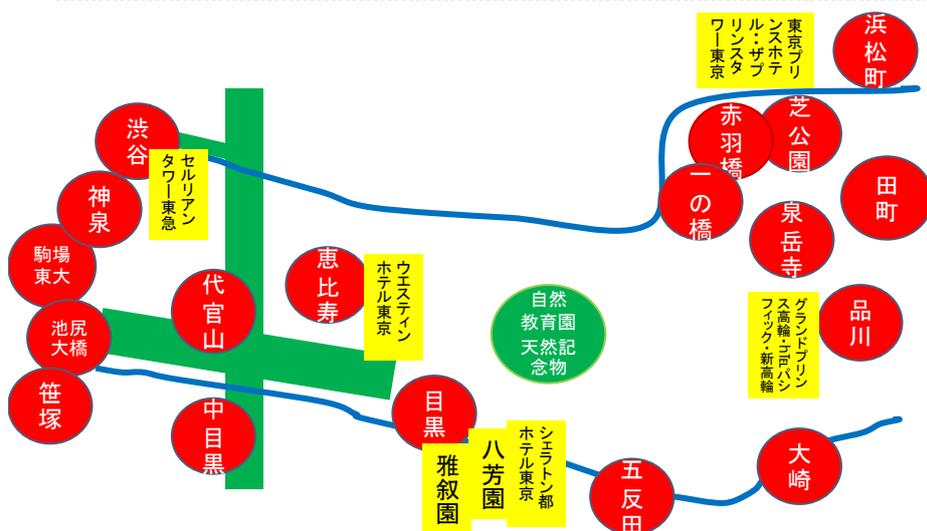
こうした事象を一つにまとめると 上のような表になります。

つまり、これまでは「自動車経済圏」だったということがいえるのです。中心にマイカーがあって、郊外 SC、郊外住宅、郊外レストラン、カラオケ、ファミレス等、自動車を前提とした商業圏や新業態が生まれ成長した。ところが、今は「自動車経済圏」から「徒歩経済圏」になってきているということです。要するに人々は歩いていける範囲で生活を十分楽しめる、むしろそうした商品やサービスの方が求められていて、具体化もされている。徒歩活動が日常的に非常に活発になってきているし、徒歩移動に伴う消費活動が活発化しているということです。それを意識した街づくり（コンパクトシティ）まで出てきていると報告しています。

ここでは「プラチナ経済圏」という名前で紹介されていますが、三菱総研の小宮山宏理事長、東大の総長だった方ですね、この方が提案しています。そこには環境負荷の低いエコでコンパクトな街づくりをしていこうと、このプラチナ構想は高齢者が元気に暮らせる町と規定して、国内 100 都市を再開発できると想定しています。三菱総研によれば関連市場は 13 兆円発生するそうです。その 13 兆円に代官山エリアは入ってないと思います。しかし三田用水エリアを含めて、このエリアを徒歩経済圏という意識で構想することによって、新しい需要が創出できると考えます。これもスタイル研究会の皆さんと議論をしながら、考えていければ良いと思います。つまり、「代官山エリアと旧三田用水の水系エリアを徒歩経済圏と設定」することによって「閉塞突破の需要創出」の可能性があるといたいのです。

下の図は、そのための主な拠点です。大きく言えば旧三田用水は山手線の渋谷駅、恵比寿駅、目黒駅、大崎駅、品川駅、浜松町駅のカーブに沿うような形になっています。渋谷駅には多くの私鉄と地下鉄線が接続しています。赤色・赤字で示したものは交通の駅、鉄道駅、地下鉄駅の主要なものです。黄色は国際級のホテルや会合施設です。近代的な品川や渋谷のホテル群だけでなく、歴史のある八芳園、都ホテル等は昔は三田用水の

代官山エリアと旧三田用水水系の徒歩経済圏が閉塞突破の「需要創出」を可能にする



水を引いた、美しい庭園や池が残っています。そういったものが随所にあります。またエリアの真ん中に白金「自然教育園」が緑の象徴のように大きく存在しています。施設全体が天然記念物で、江戸以前の東京の自然に触れられる貴重な場所です。鎌が崎には大正

期の旧朝倉邸の建物と庭園が重要文化財として保存されています。他にも駒場野公園のケネル田圃、駒場公園内の前田邸跡地、西郷山の西郷邸跡地、大崎方面の寺町、関東閣（岩崎邸）、重要文化財である慶応義塾、三田演説館等、本当に貴重な歴史的・文化的・社会的資産がこのエリアには集中して残り、集積しています。

この資料をつくっているときに、ふと思ったのですが、例えばこの近辺に1泊して、三田用水の文化資産といいたいでしょうか、そのいわれ、足跡を訪ねたり、話を聞いたりするツアーやカルチャーセミナー等はいくらでもできると思いました。それと渋谷川を経て古川が東京湾に注ぐ先に浜松町駅があります。この周辺にはプリンス系のホテルが多数あります。モノレールを経由すれば羽田空港へつながり、国の内外から人を呼ぶこともできます。

エリア全体を江戸時代から続く日本の歴史的時代変遷、水路や水車がたどった日本の近代化の足跡、文化的遺産、そういったものを見て、歩き、学ぶ。有意義なツアーが商品化出来ます。2・3泊～1週間ぐらいの多様なプログラムとコース開発が必須です。旧三田用水を学び、密度の高い日本文化を学習するサービス商品化の機会がつくると思います。

1日歩けば疲れますから、代官山辺りの茶屋（カフェ）で一休みとか、お土産も（代官山で）何か探す、東アジアを巻き込んだシンポジウムをやろうとか、代官山にとっても、エリア全域にとっても、大変プラスになる計画と考えた次第です。以上が代官山の徒歩経済圏（＝徒歩文化圏）の話です。

しかし、これをやるといっても簡単ではありません。代官山と三田用水の魅力アップ、誘客のために大事なポイントをまとめておきました。最後に項目だけ読んでいきます。これは、代官山の将来のためにも必要なことです。

代官山と三田用水、魅力 up・誘客のために

- ・コンセプト・ブランドの維持・管理・開発・育成
- ・ブランドステートメント、メッセージ、ロゴ、使用ルール、他
- ・タウンマネジメントとマーケティングの研究・開発・実践
- ・業種・業態別クラスターの組織化とネットワーク化
- ・代官山商品群の開発（代官山スーベニール）
- ・代官山街歩き・三田用水の探検、探索、推薦ルートの設定
- ・マップ、ガイド本、サインシステム（日・英・中・韓）
- ・PRセンター設置（プレス・ガイド・フィルムコミッション・他）
- ・コミュニティ・ホームページ充実（＝DHP強化）
- ・代官山ファンクラブ育成（住民・店舗・事業者・来街者・他）
- ・活動資金・スタッフ・運営事務局などの基盤整備

まず最初にコンセプトとかブランドの維持・管理・システム、それからステートメントやメッセージ、あるいは使用ルール、そういったものを決める。次に、タウンマネジメントそのものの問題。これは一番難しい問題で、これからの課題ですが。タウンマネジメントとマーケティングの研究開発母体。どちらも難しい問題です。その手始めとしてはエリア別・通り別・業種・業態別のクラスターの組織化やネットワーク化からスタートすべきではないかと考えます。

次の「代官山商品群」は、代官山スーベニールです。徒歩経済圏ができたときに、当然代官山に来た、あるいは三田用水に来た、そういった記念になるお土産が欲しくなります。

名前だけのスーベニールだったらないほうがいいですけども、三田用水らしいものが何かできたと思います。

それから代官山のまち歩き、あるいは三田用水の探検・探索・推薦ルートの設定。そのマップ、ガイド本、あるいはサインシステム、これは日本語だけでは当然駄目で、日本語、英語、中国語、韓国語ぐらいは入れていきたいですね。このような活動をすれば、いろいろなお問い合わせがあるわけですからPRセンターを設置してプレス対応、ガイド養成、あるいはフィルムコミッショナー事務局を用意して、映像等々で世界中に発信することもできます。

それからコミュニティのホームページの運営・充実も大切なことです。私も代官山ホームページをやっておりますが、きちんとサポートできるような仕組みが必須と考えています。それから「代官山ファンクラブ」みたいなもの。代官山は住民とか、店舗とか、事業者とか、来街者とか、非常にたくさんの方々から、親しみを持っていただいているわけですから、そういった方を束ねていけるようなネットワークというか、クラブ、あるいは全体を包み込む「コミュニティ・アソシエーションズ」といったものがあればいいと思います。ヒルサイドテラスではクラブをつくって、先行してやっています。時々参加させていただきますが、いかにも代官山らしい雰囲気非常に楽しみにしております。ただ、これまで述べてきたようなことをやるには、活動資金、スタッフ、事務局などの基盤そのものがが必要です。それが代官山にとっては最大の問題であると思います。

大変雑多な、多様な提案でしたが、一応私の徒歩経済圏に関する提案を終わります。

石原：どうもありがとうございました。あつという間に3部までできました。今の報告を聞くと本当に何かやらなきゃいけない気持ちと、岩橋さん提案の「徒歩経済圏」は、実は代官山にすごく提案だと思えます。湊元さんの調査報告には「代官山は時間を過ごして楽しむところ」という調査結果もありました。ですから、カフェだとか、美容院だとか、そういうところは非常に人気があるという現状です。そこにやるべきことを全て盛り込むというのは大変だとは思いますが、ここにいらっしゃる皆さま方にご協力いただきながら、魅力ある代官山を発信するためにも、こういう課題を一つずつこなしていければいいなと思えました。

第4部「代官山座談会」

石原：これから地域の方々と一緒に「代官山座談会」として、地域資源と代官山の活性化をテーマにお話をいただければと思います。

座談会の司会は、代官山ステキ総合研究所の副理事長、元倉さんをお願いいたします。次に伴文康様にご登壇をお願いします。伴様は長谷戸町会長というお立場と、代官山ステキな街づくり協議会理事長等、さまざまなお立場でまちづくり活動をされていらっしゃいます。続いて海老沢宏様。海老沢様は鶯谷協和会の町会長、先ほど岩橋さんが触れた渋谷との節点にある町会長さんです。海老沢様は商工会議所・渋谷支部の重鎮としてもご活躍され、生まれも育ちも鶯谷です。次は佐藤與治様です。佐藤様は「めぐろ観光まちづくり協会」の会長さんです。佐藤様は目黒区にある代官山スタジオ、代官山花壇等を長く経営されています。皆様、代官山とは深くかかわっていらっしゃる方々でございます。それから唯一若手ということで旧三田用水の発表者、牧様にもご参加いただきます。

それでは元倉さん、よろしく願いいたします。

元倉：みなさまよろしく願いいたします。

第3部までは報告や提言ですが、こちらからの第4部ではご登壇いただいた方々にお話

を伺い、後で会場のほうにマイクを向け、皆さんでコミュニケーションをするかたちで進めたいと思います。

私が司会をやることになったのは、一つは大学（東京芸術大学）で谷根千に少しかかわっていること。谷根千がまちづくりで有名になったのは、森まゆみさんたちを中心に機関誌をつくって、地域誌を作りながら、地域のことを丹念に聞き取り、掘り起こした、地域のデータベースつくっていきました。そのうち谷中の人たちが自分たちの場所を深く知る、自分たちでその価値を勉強し、認識することによってまちづくりの原点をつくったということがあると思います。そういうことに少しかかわっていることが一つと、もう一つ、僕が教えに行っていた山形の朝日町、最上川の河岸段丘にある美しい町ですがそのエコミュージアム、地域丸ごと博物館と翻訳されることが多いようですが。そこに私がかかわっていたということで、地域の資源とまちづくりということに関心を持っているということで、司会を仰せつかったと考えております。

それでは、まず皆様に簡単な自己紹介と、牧さんの研究、話を聞いての印象等を簡単に述べていただけたらと思います。伴さんからお願いいたします。



伴：私はまちづくりの専門家でも何でもないので、私自身は会社勤めのサラリーマンでございまして、約 50 年、何やかんやで 55 年ほど会社勤めをしておった人間でございませう。70 歳ごろから町会のことをお手伝いするようになりました。たまたま私が代官山の駅前に住んでおります関係で、きょうのこの座談会も含めて、まちづくりということに皆さまのお知恵を伺いながら興味を持って参加している一人でございます。

きょうは牧さんから旧三田用水、もともとは三田上水が三田用水になり、今はなくなっておりますけれども、その背景を含めたお話があったことに大変興味を持って伺いました。いずれにしても三田上水のときも三田用水のときも非常に趣があったのですが、三田用水

の水がストップしてから、その跡地が地続きの方のところへ売却され、個人所有になっているのではと思います。これを一帯として利用するかにつきましては、また見直しをしなければいけないとおもいます。歴史的な産物としては大変興味があります。見事、掘り起こしていただきましたことについて私もお礼申し上げたいと思います。

元倉：ありがとうございました。海老沢様、願います。

海老沢：海老沢でございます。私はたまたま私の地所の中を三田用水が走っておったわけですよ。渋谷で私の祖父が明治の末期あたりだと思いますが、朝倉さんのおうちにもだいぶ通ってたようで、それからフジクラという会社がありまして、今はフジクラ、以前は藤倉電線ですね。私の祖父は電線工場を創業しまして、この渋谷の中で、鶯谷町と言いますが、そこに三田用水が私の屋敷の中を通っており、たぶん大昔はその水を使って水車を回して、工場を回して事業をしていたんじゃないかなと思います。渋谷には古河電工の流れをくむ千代田電線という電線会社もありましたが、いろいろ世の中が大きく変わっていきまして、もう渋谷で工場をやることができなくなり、跡地をどうしようかと、工場は御殿場のほうへ全部移しております。空いたところを開発しようというところまではよかったです。三田用水、これがドーンとありました。これは今恵比寿の防衛庁、あの先に関東財務局がありまして、そこから手前どもはこの三田用水を払い下げていただきまして、全部名義も変えて今の渋谷区鶯谷町に株式会社コムスという会社を建て、オフィスビルの仕事をしております。東急不動産と一緒にやっております。たまたま三田用水をうちのところに通っておったものですから、岩橋さんに引っ張り出されたんじゃないかなと思っております。以上です。

元倉：ありがとうございます。興味深いお話です。もともと電線の会社をおやりになるために三田用水を含んだ土地を入手されたのですか、それともともとそういう土地にお住まいになっていたのでしょうか？

海老沢：違います。私の祖父は荷車引きです。それで朝倉さんのお米を運んで、それからそれが終わった後、藤倉電線、これは今でいう文化服装学院、あの辺にありました。それで藤倉のほうから「海老沢、おまえはまじめそうだからうちの仕事を手伝わんか」ということで、大正時代の初期に渋谷の鶯谷で町工場を始めた。

元倉：すると工場をやるのに、水があって適した場所だということで選んだのですね。

海老沢：たまたまそういうことだったと思います。

元倉：どうもありがとうございました。引き続き佐藤さん、お願いいたします。

佐藤：私の会社は目黒区ですが、ここから4〜500メートルぐらいのところですよ。商工会議所の目黒支部の仕事をやる前はいつもこの辺を歩いていました。こちらのほうが何となく気分がよかったのです。朝は起きて鎗が崎から恵比寿のほうに行って、恵比寿から桜丘、代官山にはうちのお店があるのでその監督をして、さらに渋谷の駅まで行って、それから桜丘を登って南平台、それからこっちに渡って青葉台の3丁目辺りから、こちらに歩いてくる。するとソニーの盛田さんのうちがあって、何でそこに道あるのかなと考えながら西郷山公園の脇の道を見て、あれが三田用水の跡だったのかという話なんですね。

その後、反対側の恵比寿公園のほうもずっと歩きました。考えてみれば私が生まれたところは下北沢と代田の間です。そこにも川が流れていました。後で笹塚から分かれてきた水路だとりました。

私のところは石炭屋だったのですが、途中から石油、スタンドをはじめました。東山のところにスタンドつくった、その前に流れていた川が三田用水なのですね。三田用水が何かすぐそばのところにもうひとつ道があって、笹塚のほうへ行く細い道です。その下が三田用水だっていうのを後で知りました。そんなことでこの周辺は昔からよく歩いていたと

ころだと思いながら、お話を聞いたり、地図を見て、三田用水の断片的な記憶がつながってきました。どうもありがとうございました。

元倉：ありがとうございます。きょうのお三方にお願いしたのは三田用水の古いことを記憶されているのではという私たちの意図もありました。佐藤さんからその話に触れられましたけれども、三田用水に関して自分はこんな記憶があるということ、若い牧さんに研究資料を差し上げるようなつもりでお話いただければと思います。

伴：私が三田用水の存在を知ったのは、東京オリンピックを契機に駒沢通りの拡張工事の話が出た時です。駒沢通りの上を三田用水の水が通っていたのです。工事までは私は何も関心無かったのですが、広がったと思ったら、途中でポタポタ、ポタポタ水が落ちるようになってきて、「あれあれ、こんなところに水が流れているんだ」と思って、今度はもとのお地蔵さんのところへ行きましたら、とうとうと水が流れておりまして、「ありゃありゃ、これは大変なことなんだな」という感じが一つ。

それからもう一つは、茶屋坂のところ、茶屋坂もやはり道路拡張になり、もともとは上にトンネルになっていたのが今は全部取られてしまって、ご存じのとおり、ここに三田用水ありという碑が、壁のところにございます。あれを見まして、ここにも流れていたのかと分かってから、ちょっと自分でも資料にあたったり、三田用水に関心を持つようになりました。

その途中、用水の水がなくなったとき地域の方から、今度水が止まるので、その土地を買ってくれという話が来たけどいかなものかしらと、私はよく相談を受けました。それはどのくらいですかと聞くと、まるきり捨て値ですねと私がいうと、自分の土地が広がることでもあるし、いずれうちを建て直すときには、それは有利なことだからぜひ買っておいとくださいと話した記憶があります。そういうことで三田用水には関心があって、それをまとめてみて、牧さんほどの研究までいかなかったのですが、いろいろな本をあさりまして、用水のことについて少し関心持ってやっておりましたが、今回、牧さんに立派にまとめていただいて大変ありがたかったという印象です。

元倉：子どものときにそういうところで遊んだような記憶はありませんか。

伴：ここで育っておりませんので、子どものころは全然関係ございません。

元倉：失礼しました。佐藤さんに伺います。駒沢通りの上の水道橋は、すぐそばですよ。

佐藤：はい、そうです。

元倉：何か記憶はございませんか。

佐藤：記憶はありますよ。これまでのお話のとおりです。その後、壊して払い下げするとかいうところなんかも知っておりますが、そこで遊びはしなかったです。子どものころは坂の下の目黒川のところにいましたので、目黒川には土管を通過して下りて行って散々遊びました。三田用水に入って遊んだ記憶はないです。あとはだいたいぶたってから、いろいろ歩いて、真っすぐな道、三田用水の跡をたどっていく道があっても、途中で切れちゃまた出てくる、地図を見ながら歩いています。最近「めぐろ観光まちづくり協会」というのができまして、今言ったように歩くところを探しています。ただ、暗渠になったところですね、蛇崩川とか、今、動画を iPhone で撮って歩いております。小道ごとに昔は区が花などを植えたいいのですが、看板もそのまま、そういうところをきれいにすればいいなと思いつきながら歩きまわっています。

元倉：ありがとうございました。海老沢さん、屋敷の中を三田用水が流れてとおっしゃいましたが、その辺の話をもう少しお聞かせください。

海老沢：たまたま私のうちのは、よく氾濫する川だったんです。三田用水そのものは暗渠になって、うちの中をズーッと通って、鉢山交番の5～6メートル横をズーッと流れてお

りました。それで八幡通りの線に添って、これは山手線の下をくぐって、並木橋のところへドーンと、渋谷川へ落ちていました。たまたま私の屋敷の中に三田用水が流れてたということです。その後、東京都の下水道がどんどん整備されてきて、この三田用水というのも途中でストップというか、全部閉められたということです。

あと渋谷に鶯谷公園というのがありますけど、そこなんかもう埋められて公園になっています。その鶯谷公園というのは鉢山中学のすぐ横です。乗泉寺というお寺の隣です。この辺は大昔、山本男爵のお屋敷だったようです。私の三田用水の知識はそのぐらいでございます。

元倉：一つお伺いしたいのですが、三田用水に限らず、ここ10年以上代官山はずいぶん変わりました。人も家も増えましたけれども、海老沢さんからごらんになって、昔と変わらない、代官山らしいところをご紹介ください。

海老沢：今、代官山らしいいたらヒルサイドテラス、朝倉さんのとこですよ。それから西郷山(西郷山公園)だね、あそこも遊び場でしたし、朝倉さんのお屋敷の中でロケット飛ばして遊んだりね、火事にしたり、大変なことがありましたね。ここは面白い遊び場だったんですよ。

元倉：もう少し細かいところ、つまり、若いとき、あるいは子どものときの風景を組み立てることができるようなところはありますか。

海老沢：猿楽塚ですね。前は日本家屋の立派なおうちが奥にありまして、朝倉邸は、とにかく日本一の米屋だったらしいですよ。

元倉：ありがとうございます。それでは会場の方から2〜3お聞きします。まず北沢川文化遺産保存の会、三田用水に関しての古いこと、など何か教えていただけるとありがたいと思います。

キムラ：北沢川文化遺産保存の会をやっておりますキムラと申します。僕たちが主催した三田用水を歩く会に牧さんも参加されて、彼に研究発表するときは僕らを呼んでほしいと話してたんです。それで、ついこの間メールいただいて、これは行かねばということで、今日まいりました。

僕らも三田用水を歩く会などやったりして、面白く遊んでいます。三田用水というのは埋もれた文化遺産だと思います。そのことを牧さんが非常にビジュアルなかたちで見せてくれたということは、非常に社会的な発信としても重要であると思います。どういう歴史的なものであったかということが忘れ去られているというか、特に尾根筋道からズーッとたどって行って、北の御殿山まで行く、その道筋を非常にビジュアルに見せてくれたということが、僕なんか見ててワクワクしました。この道筋というのはほとんど知られていません。目黒川の左岸崖線というのは3つの景観があります。1つは夕日がきれい。それから富士がきれいに展望、遠望できる。もう一つは、望郷ラインであるということです。与謝野晶子がわざわざ、西の空のことを詠んだ。そうだったのですね、文学が眠っています。国木田独歩、田山花袋、それから駅夫日記、目黒駅の。それから下流にいくと蛇窪の踏切の絵等など、文化的な価値が非常にあるところです。そういったことを提示されたということです。

それから最後に尾根筋の道を造ろうというのはグッときました。実は僕らこの道の地図を作ってます。世田ヶ谷のほうのちょうど取水口あたりのことについて次に出す地図に載せたいと思っています。世田ヶ谷のほうの案内図は僕らのほうで作る、こちらのほうでは渋谷区のを作っていただき、目黒区のほうにつなげると、非常に価値あるものになります。

それから先ほどの「徒歩経済圏」。ほんとに今の人たちは歩くことが好きです。私たちも歩いて、確かここら辺で昼食を取り、この辺でお金を使っているんですね。そういった

こともできるかと思います。方向が示されればそこにやってくるのです。何かいろいろなお話しいたしましたが、きょうの牧さんの発表は非常にワクワクしながら、面白く聞きました。どうもありがとうございました。

元倉：熱烈な応援演説だったようです。ところで代官山の古い話は、この方からも改めて聞いておきたいと思います。朝倉徳道さん、お願いいたします。

朝倉：朝倉でございます。あまり古いことは知らないのですが、本日の参加者でたぶん一番古い年齢だと思えます。

さっき海老沢さんの話では、海老沢さんのお屋敷の中を流れていたって言うのですが、私が聞いた話では、元倉さんが設計したヒルサイドのウエストの近くに、隠居所というのがあって、私から見ると曾祖父ですが、その後ろに大きな池があったという。それは今朝倉住宅の中で門を入れてすぐ左側にガレージというか、車庫がありますが、その車庫を造る前にそこに池があったのではないかと思います。

それからあと私がじかに見ているのは、小さいときでいいますと、猿楽塚の根っこの辺りにたぶん取水口があって、それから C 棟のトムスサンドウイッチの前辺りに小さい池があって、そこへ水を引き込んで、それから庭のほうへ、川に流していったのではないかと、そんな感じでございます。

それでさっき佐藤さんから鎗が崎の交番の裏こは一部でふたがないところがあり、水が流れてるのが見えたというお話です。私もそれは記憶あります。あとはだいたい暗渠になって、僕の記憶では暗渠の工事を、旧山手通りの舗道の下を掘っていた記憶があるわけです。私は昭和6年生まれですから、記憶があるとすると、10年か11年ですが、散歩してたら落ちちゃった記憶があるんです。落ちてもけがをしないで、すぐ引っ張り上げられた程度の深さの暗渠だった感じです。だいたい記憶ではそんなことです。

それでちょっと僕、逆に牧さんに質問してもいいですか。さっきお話の中で、いつになりますか、2年ぐらい用水が止められたというのは1900、享保何年かで、何かあったのですか。室鳩巢という地学者が吉宗に、あまり用水を掘りすぎると地面の神様が怒って火事を起こすというんで、それを将軍が聞いて用水を埋めさせたとかいう話がありますが、そんなことでしょうか。

それからもう一つは、明治になってから、三田用水事件というのがある。それはビール会社が正規の取水口とは別に穴を開けて水を引いたというんで、何か裁判になったというのですが、僕ももっとほかにも幾つもありそうな気がするんですが、そのへんはどんなものかなと思うんです。ご存知でしたら教えてください。

元倉：牧さん、ご存知ですか。

牧：まず朝倉さんのお話は、2年間止まった理由ですね。江戸時代なので將軍の近くに、学者、先ほどの名前のおおりの、室鳩巢その人が、江戸中の玉川上水を引き入れているが、そこから地下水脈を上水が全部くみ上げちゃって空にしているとか、用水が通っているところが風水的によろしくないということで、全く理にかなってない運氣的な理由で一気に、三田上水だけでなく、ほかの5～6本、同じ玉川上水系の分水路で上水が止まっているんです。その中で復活したのは、やはり直前まで農業をやっていた方が地域の間で強いコミュニティを形成していて、強く懇願し、2年間で復活したということなんです。

もうひとつ三田用水事件というのが裁判ざたになっています。やはり三田用水利水組合が管理をしていましたが、三田用水が止まるにおいてその跡地、跡地の所有権を争ったんです。結果としてその利水組合は負けてしまうわけで、それで現在個人所有とかもできるようになって、分断化が進んだのかと思います。詳しい話はキムラさんという方にその資料とか、文面を全部いただいて、一度全部目を通しましたけども、あまりにほかの文献とかも目通しすぎちゃいました。なので詳しいところは聞いていただければいいと思います。

キムラ：そのキムラは私ではなく別のキムラです。本職は弁護士の方で、三田用水のこと詳しく、三田用水事件はお手の物で、確かネット上にも詳しく載せていたと思いますのでごらんください。それからわれわれは三田用水を歩く会を催していますが、ツアーコンダクターも彼に頼んでいます。彼はお金を取らないで、僕らは資料代として 500 円取ってます。話が変なとこいっちゃいました。全然違いました。

伴：私がちょっと調べたところでは、今の話ですが、享保 7 年、1722 年に三田上水が廃止になったということがあります。それで目黒の 4 カ村の人を中心として 14 カ村の方々が、これを農業用水として利用したいということを幕府に願い出て、それで幕府がそれを許可すると同時に今度は大改修を完了して、それが完了したのが享保 10 年、従って 1725 年に改修が終わって、それから三田用水という名前になって、いわゆる田んぼを含めた農業用水に使われたということは文献に出ております。

元倉：ありがとうございました。

牧さん、たぶん徳道さんの話も含めて、まだまだ三田用水について記憶されている方が、たくさんいらっしゃるかもしれません。今日その一部を短い時間で聞くことができました。そういう人たちの生活をあなたが受け取って何かを考え、論文にしたわけだけでも、その印象みたいなことをお話し願えれば。

牧：きょうは貴重な生の三田用水があった時期の話が聞けました。第一に僕が生まれたときにはもう三田用水はなかったわけですから。じかに経験された方の生の意見というのは大変貴重な声でした。僕の研究は、文献調査だけで手いっぱいになってしまっていて、現地ヒアリング調査という段階まではいってなかったのが、今回はいろんな生の意見というのが得られて大変よかったです。

資料でも生の意見というのは読んでいましたが、駒沢通りにかかっているすごいスパンのある水路橋から水が大量に落ちて滴っていたというのは、それを体験された人が描いた絵も残っていますが、やはりそういった印象は、多くの方に残っていたのかということが、実際に体験した方の生の声が聞けてすごく感動しています。

やはりこれから、こうした生の意見によって詳細な図面というのができると思います。僕が作ったのは大まかな図面しか作ってません。研究を進めるとしたらここに池があったとか、そういうのをどんどん掘り下げることがこれから必要なことじゃないかなと、と思いました。

歴史的な文献を掘り下げていくというのは、終わりが見えないことなので、どこで切り上げるかという話でもあるので、僕の研究ではここまでということだったので、これからは誰か続いていってくれればと思います。

元倉：ありがとうございます。きょうの牧さんの発表で、三田用水というものに注目をして、街をもう一回、深く考える。町の表面や、今の現象だけではなくて、もともともっていた地形や場所の記憶、自然や歴史など、そういうものの上に、今われわれがいるということ。それがいかに価値があるかということを彼の研究でもって私たちは、あらためて教えてもらったわけです。

今現在の街を見たり、考えたりするときに、先ほどのキムラさんたちの活動も含めて、ちょっと前の本でいえば、中沢新一の『アースダイバー』という本とか、もっとポピュラーなところでは最近NHKでやってる『ブラタモリ』の中で彼の非常に細かい道の地形のこう配を注意深く見ていく、ああいうこと。これはたぶんわれわれがあまりにもひたすら走って、その街を変えていったわけだけでも、どうもそれに対して、どうも違うぞという、全体の大きな流れというものがあると思います。

そういうことを牧さんの研究があらためて僕たちに教えてくれたわけですが、実はまだ知るだけでは駄目で、牧さんからの提案もありましたとうに。そういうことも含めて、つまり実際にわれわれは代官山という場所のフォーラムですが、その代官山が牧さんたちが気が付いていることをわれわれのものとして現在の街を考え、それから将来の街を考えることをしなくてははいけないわけです。

時間がないので最後の質問になりますが、きょうお越しくくださったパネラーの方、少しお年を召した方なので、後輩に対しての提案なり、こういうふうにしてよねということでもいいと思いますが、そういう代官山の資産をどんなふうな方法で次のまちづくりに、まちの在り方につなげたらいいか、また伴さんからいいですか、お願いします。

伴：それでは私が口火になります。牧さんの研究発表と、私の経験から見ますと、このまま放っておきますと、三田上水に始まった三田用水というものの痕跡がなくなってしまうわけです。従いまして、できるだけ早い機会に三田上水の後の三田用水の跡地が現状としてどこどこにそれが特定し得るのかということ、せめて写真にでも撮っておいて、それが資料としてまとめるられれば大変いいのかなと思いました。おそらく10年、20年するうちに風化する以上に宅地化してしまって、痕跡さえなくなってしまうんじゃないかなと感じがしておりますから、ぜひそれを提案したいと思います。

元倉：ありがとうございます。海老沢さん、お願いします。

海老沢：僕は三田用水というものがあるということはよく分かってたんです。渋谷川にこの三田用水が流れ込んでいたというのも、実は僕たちは自分の目で見ていたから分かってるので、今下水道が非常に発達したために、そういった姿が見えなくなっていることは事実ではないかと感じておりますので、ぜひこういうことに興味を持っている方の集まりというのはよろしいんじゃないかなと思います。

元倉：見えなくなっている、もともと見えてたわけですね、もともと川があって見えていたわけ、渋谷川もそうですけれども、それはやっぱりもう一度、この先われわれがスペックとしてもう一回見えるような方向でそれを考えていくということが大切ですね。

海老沢：これを見えるようにするというはまず不可能です。だって、今私のところに走った三田用水は、全部埋めちゃっています。私のところでは、関東財務局から買い上げて、その上に建物が建ってます。それから道路になっているところもありますね。

元倉：一つの川筋として全部を見えるようにするのは不可能だと思いますが、何か、そこにあった記憶とか、手掛かり。例えば新宿御苑では玉川用水の一部を再生させるという話もあります。新宿御苑だからそれができるわけですが、でも一部でも再生させることによって、消えた向こう側とこっち側の川をイメージすることはできるわけです。つまり川があったんだなという。たぶんそういうことも含めて、何か見えるようにするということだと思います。

海老沢：三田用水というのはもうほとんど分からなくなってますね。ほとんど形がないでしょう。

元倉：形はないですね。

海老沢：それはハッキリ言えると思います。

元倉：ありがとうございます。佐藤さん、いかがですか。こんなふうになったらいいよということ。

佐藤：尾根から渋谷川のほうにまで流れてることは意識してませんでした。どこ流れていたかと探して歩いたりはしませんでしたので、どういうふうになっていたか分かりません。それから代官山というのは、私のイメージでは、代官山らしいという猿楽とか、こちらのほうで面白いところがいっぱいある。そういうところが楽しいのだと私は思います。商売の要因として外来の方から見てもそのほうが楽しい。でも一般的に言って代官山は土日もってウィークデーが来ないから商売が厳しいという話を非常に皆さんしております。

元倉：ありがとうございます。時間が超過してますが、せっかく来たので発言をしておきたいという方。お願いいたします。

岩橋兄：三田というのは、いつも港区の三田と間違われます。町の名前というのは筈町だとか、笹笥町だとか、根拠があって町名が付くんで、何か三田用水と三田というのが関係あるかないかが非常に気になっていました。ぜひ教えていただきたい。

牧：目黒区の三田というのは完全に三田用水の名前の由来になったところです。三田村というところを通るから三田用水という名前になったのだと思います。港区の三田のほうにもずっと流れていったのですが、そっちのほうが後の三田だと思います。

菊池：三田用水はまさにこのホールの上をドーンと流れていたんじゃないかなと、先ほどから思っているんですけど、朝倉家の真ん中を目黒区と渋谷区の境界線が走っています。それが最初の流路だと思うのですが、いつ流路が変わったのが、もしくはほんとの流路はどこだったのかをぜひお伺いしたいんです。

朝倉：私には記憶はないのです。先ほど申し上げたように舗道の下に暗渠があるはずなので、それよりこっち側に川があったのだらうと思います。ですから、ちょうどこの上ぐらいでしょうか。確かここにヒルサイドを建築するときに河川敷が出てきて、三田用水の組合と実際に交渉した弟が何か知ってるかもしれません。どうでしょうか。

朝倉弟：朝倉です、弟のほうです。どこを流れていたかという根拠ですが、ヒルサイドテラスを建てる時に土地を実測したわけです。当然、公図も見ますが無地番の帯状の線が残っていたんです。それは間違いなく三田用水の跡です。それは部分的に残ってまして、実際には戦前に暗渠になってるわけですから、何かそのときのミスというか、残ってたわけです。それをどうすればいいかというと、当時恵比寿と目黒の間に三田用水の組合事務所があって、担当のおじさんがいましてね、何か頑固そうな。そこへ行って判子をもらえばいいということで、判子をもらったことがあるんです。

その後にもう一つ、たぶんそれは三田用水と最後の関わり合いかもしれませんが、地番が付いてるところがあったのです。地番が付いているというか、本当はまだ三田用水のものだった。それがあるとヒルサイドの三期はつくれませんので、最後の最後に払い下げてもらった6平米ぐらいの場所、それがたぶん三田用水の現役の最後だと思います。間違いなくそういう事実がありました。

元倉：ありがとうございます。時間が大幅に過ぎました。伴さんの意見にあるように三田用水を風化させちゃいけない。それから代官山のまちづくりの中で生かしていかなきゃいけない、その方策はどうしたらいいか。この次はそのことを集中して討論し風化させないためにはどうしたらいいかということが重要な問題だと思います。

それから個人的には、牧さんの小さい写真の一個一個をもうっと大きい写真で見たいと思いました。何か展覧会みたいなものを僕らで企画するべきかもしれないとも思いました。この三田用水を大切にしながら、代官山をもう一回きちっと将来の代官山をつくっていく、

それが非常に重要だということも分かった気がします。

意見を交換する時間も十分ではなかったと思いますが、予定された時間がきましたので、ひとまずこれでお開きとしますが、この後石原さんのほうからお話があると思いますけども、取りあえず第4部をこれで終了させていただきます。どうもありがとうございました。

石原：どうもありがとうございました。実は、僕は三田用水で泳いだ経験があります。昭和35年ぐらいから、駒沢通りの上にあったオープンのところ、20メートル、25メートルぐらいのところ。身近な三田用水ではそれ以外にあまり記憶はないんですけども、でもいろんなところに滝があったり、池があったり、それで今残ってる部分も幾つか実はあります。そういう歴史が培ってきたものも、失われていくかもしれません。でも、こうやって光りを当てていく中で、少し歴史の継続性みたいな部分を大切にすることが重要かと思っております。

それでは、だいぶ時間も経ちましたが、朝倉さん中締めをお願いします。

朝倉：きょうはお忙しいところを長い時間、ご静聴いただきましてありがとうございました。三田用水は、少し話しにも出ましたが、確かに何も残ってなくて、いろいろ昔を懐かしむ人も大勢います。しかし現実にはどこに流れていたかを知ってる人も少ないし、なぜ暗渠になったかということもよく分かりません。僕なんかは実際にこのヒルサイドを建てる立場で大変迷惑なものが残っていて、その痕跡を本気でなくそうと思たわけです。だからそういう思いと今、話題になっている三田用水の話がかみ合いません。当時は三田用水の話というのがほとんど話題にもならなかったわけです。

ですから僕はそのへんのことが知りたいと思っています。きょうは長い間ありがとうございました。

石原：どうもありがとうございました。ほんとに長時間にわたって、失われた文化遺産、これを心の中に宿していただきながら、明日の皆さんの町の街づくりに、ひとつ歴史ということ踏まえながら対応していただくと大変ありがたいなと思っております。では、ほんとに長い間ご静聴ありがとうございました。

二次会は、先ほどご登壇いただきました佐藤会長の経営される代官山花壇です。会場の都合で、代官山ステキ総合研究所会員の方々と東京商工会議所の方々、それから代官山スタイル研究会の方々に絞らせていただきます。

きょうはほんとに長い間ご静聴ありがとうございました。

東商・代官山スタイル研究会の報告と
旧三田用水に関する研究論文の発表

NPO 法人・代官山ステキ総合研究所
第6回フォーラム代官山

全 体 報 告 書

編集・文責：NPO 法人代官山ステキ総合研究所・事務局
〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町 30-8 ツインビル代官山 B 棟-601
Tel: 03-3496-1616 Fax: 03-3496-4349 090-3227-4196
E-Mail: iwahashi@aspi.co.jp <http://www.daikanyama.ne.jp/>